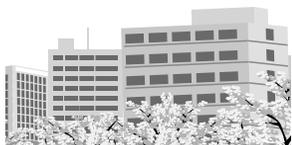


会員の広場



遙かなる山の呼び声

濱田 義文（東京）

2019年夏、アメリカの国立公園を旅行した。イエローストーンとグランドテイトンである。玄関口のジャクソンホールからパークウェイを北上すると三千米を超える岩肌の上並みが目にはいつてくる。テイトン山脈である。スネーク川に沿って息子の家族とともに

にドライブする。エルクが道路を横断している。草を食むバイソンの群れを遠くに望む。澄んだ蒼い空に、緑豊かな森と風にきらきらと水面を輝かせる湖。自然保護がゆきとどいていた。ここグランドテイトン国立公園は、映画「シェーン」の舞台となったところだ。

テイトン連峰の上並みに「シェーン、カムバック」と少年の声がこだまする。このシーンに魅せられてあらためて映画を見た。南北戦争時代にホームステッド法でワイオミングに移住した開拓農民と広範囲の土地の所有権を主張していた牧場主との間の対立抗争を映画は描いている。シェーンは農民一家を助け、最後に早撃ちで牧場主側を倒し、去っていく。西部劇の傑作である。一九五三年の作品だが、

現在と変わらぬ大自然が映し出されている。西部劇はアメリカの歴史を教えてくれる。

十九世紀はアメリカが形造られた時代である。幌馬車、大陸横断鉄道、西漸運動と開拓者精神。未到のフロンティアに挑み、失敗を怖れず、自力でやり遂げる者たちを尊ぶ気質は西部で育まれたのだろう。反面、西漸運動そのものが先住民インディアンから土地を奪い、殺戮し、病気を蔓延させ、追放していく過程でもあった。欧州から移民した白人にとって西部は自由の荒野であり、「コルト判事に訴える」保安官やガンマンはワイルド・ウエストの主人公でもあった。大陸横断鉄道敷設の陰に中国人苦力があり、南北戦争は奴隷をめぐる利害の内戦であった。西部劇をつぶ

さに見れば、分断、格差、銃社会アメリカの成り立ち、光と影を読み取ることができる。

イエローストーン公園の入り口にある西部劇の映画セットのような町に着いたとき、大きなヘラジカが一頭ゆったり歩いてきた。ここらでは日常の風景なのだろうか。銃を携えた人を見かけることはあっても、近頃西部活劇映画にお目にかかることがなくなった。人権意識の高まりや多様化した価値観におされて、西部劇は最早絶滅してしまったのだろうか。とは言え、数々の名画に映し出された大自然のパノラマは手つかずのまま今も見ることが出来る。山が呼んでいる、招いている。アメリカの雄大なナショナルパークを孫たちと一緒に再び訪れてみたいと夢みている。